

だいゆうざんせん

大雄山線ものがたり

だいいちわ

第一話

だいゆうざんてつどう

たろうと大雄山鉄道



「あっ、おばあちゃん、きしゃがきたよ!!」

「あれは、電気で動いているんだよ」

たろうは、おばあちゃんと大雄山鉄道を見にきていました。

たろうだけではありません。

こどもたちは電車がくると、追いかけたり、

電車に向かって手をふりました。

こどもたちのあこがれだったのです。

ろくさい はる
たろう六才の春。

う たいしょうじゅうよねん
たろうが生まれた大正十四年に

だいゆうざんてつどう はし だ
大雄山鉄道は走り出しました。



どうりよう まい
「みんな道了さんにお参りにいくんだよ」

どうりよう ほんとう
「道了さんにてんぐがいるって本当？」

みまも
「そう、てんぐさまがいつも見守ってくれているんだよ」

あ い
「おばあちゃん、ぼくもきしゃにのって、てんぐに会いに行きたい」

どうか いちまい み
たろうはにぎっていた銅貨を一枚、おばあさんに見せました。

きょう み
「そうね、今日は見るだけにしましょうね」

とうじ おだわら だいゆうざん うんちん にじゅうはちせん
当時、小田原一大雄山の運賃は二十八銭、

ぜいたくな^た食べ物^{もの}だったカツ丼^{どん}が一杯^{いっぱい}二十銭^{にじゅうせん}でした。

きがる^きの^る
気軽に乗れるものではなかったのです。

「この鉄道^{てつどう}ができる^{まへ}前は、遠く^{とお}から来た人^きもこの道^{ひと}を歩^{みち}いて、ある

道了^{どうりょう}さんまでお参^{まい}りに行^いったからねえ」

「たいへんだったんだね」

「そうだよ。鉄道^{てつどう}が通^{とお}ることになってみんな喜^{よろこ}んだからね」

「そうだ! 大き^{おお}くなったら、ぼくがおばあちゃんを道了^{どうりょう}さんに
つれていってあげるよ」

「そうかい、それは楽^{たの}しみだね。元氣^{げんき}でいなきゃね」



てつどう つく
「この鉄道を作るのはたいへんなことだったんだよ」

ま だいゆうざんてつどう こうじ はじ よんじゅうにちご
まちに待った大雄山鉄道の工事が始まって四十日後のこと。

おお じしん ち
大きな地震がこの地をおそいました。

たいしょうじゅうにねんくがつついたち かんとうだいしんさい
大正十二年九月一日の関東大震災です。

おだわら おお いえいえ おお かじ
小田原は多くの家々がたおれ、大きな火事がおき、

ふつう く
普通に暮らすこともできなくなりました。

しかし、その^{こんな}困難^{なか}の中あきらめずに^{てっとう}鉄道をつくったのです。



「みんなが協力して、
この鉄道が完成したんだよ。
大変なことがあつてから二年で
完成させたんだもの」
「すごいね、がんばったんだね」
たろうは、おばあちゃんの手を
ぎゅっにとぎりました。
そして心の中でちかいました。
（ほくは、大雄山鉄道にのるんだ！
おこづかいをためるぞ）

「みんなが協力して、この鉄道が完成したんだよ。

大変なことがあってから二年で完成させたんだもの」

「すごいね、がんばったんだね」

たろうは、おばあちゃんの手をぎゅつとにぎりました。

そして心の中でちかいました。

(ぼくは、大雄山鉄道にのるんだ!おこづかいをためるぞ)



「おばあちゃん、こっちこっち」

あれから、^{すうねん}数年がたちました。

たろうは二人分の切符を^{ふたりぶん きっぷ えきいん}駅員さんに^ださし出しました。

「おばあちゃんとお^{まい}参りに^い行くんです」

「^き気をつけていってらっしゃい」

^{えきいん}駅員さんは^{えがお}笑顔で^{おく}送り出して^だくれました。

^{さいじょうじ}最乗寺で、たろうは^て手を^あ合わせました。

「おばあちゃんが^{げんき}元気でいてくれますように。

そしててんぐさま、^{だいゆうざんてつどう}ぼくが大雄山鉄道の^{えきいん}駅員になれますように」



だいゆうざんせん

大雄山線ものがたり

だいにわ
第二話

へんか

じだい

い

ふたり

変化する時代と生きる二人



ふ　じ　まええき　じょうしゃ
富士フィルム前駅から乗車したゆうこは、

き　た　く　ひとびと　こ　あ　でんしゃ
帰宅の人々で混み合う電車にゆられていました。

こうじょう　はたら　しゃないうんどう　あせ　なが　かえ　みち
工場で働き、社内運動のバレーボールで汗を流したいつもの帰り道。

しゅうせん　ねん　た　しょうわ　ねん
終戦から10年が経った、昭和31年のことです。

しゃそう　ゆうぐ　とも　いえいえ
ゆうこは、車窓から夕暮れに灯る家々の

すこ　ふ　なが　す
あかりが少しずつ増えていくのを、眺めることが好きでした。

まち　せんぜん　か　つき　と　もど
町は戦前の活気を取り戻していました。



えきいん きょう
(あの駅員さん、今日いるかな…)

たの
ゆうこには楽しみがありました。

でんしゃ み こ
いつも電車を見ている子どもたちに

こえ えきいん
やさしく声をかける駅員さんがいました。

でんしゃ
「電車がすきなのかい?」「うん!」

こ すがた み
子どもたちの、うれしそうな姿を見ていると

えがお
ゆうこも笑顔になりました。

^{かいさつ} ^{とお} 改札を通るとき、その^{えきいん} 駅員さんはあいさつをしてくれます。

「はい、おかえりなさい」

「いってまいりました」

ゆうこも、あいさつを^{かえ}返します。

^{えきいん} 駅員さんのすてきな^{えがお} 笑顔に^{こころ} 心があたたかくなるのでした。



しゅうせんご だいゆうざんせん えきいん はたら
終戦後、大雄山線の駅員としてたろうは働いていました。

こ ゆめ かな
子どもころからの夢を叶えたのです。

へいわ
(ああ、これが平和というものか…)

ゆうぐ まち かえ ひとびと
たろうは夕暮れの町に帰っていく人々を

えき なが す
駅から眺めるのが好きでした。

ひ び きょう
日々のしあわせを今日もかみしめていました。

「^{ひと ふ}人も増えてこの^{えんせん}沿線もにぎやかになったな」

「^{じだい}すっかり時代もかわりましたね。

「^{せんたくき か}うちはついに洗濯機を買いました！」

「それは、うらやましいなあ」

「^{あ す みどりちょう}たろうさん、明日は^{あぶら}緑町のレールに^{とうばん}油をぬる当番ですよ。

「^{てさぎょう}こちらは、まだまだ手作業ですね」

「^{あんぜんだいいち}がんばろう。安全第一！」



^{しやない} ^お ^な ^か ^ま ^{ふくろ} ^も
 車内のそうじを終えた仲間が袋を持ってきました。

^{わす} ^{もの}
 「また、いつもの忘れ物がありました。」

^こ
 「ああ、あの子のだ…」

^{わす} ^{もの} ^も ^{ぬし} ^し
 その忘れ物の持ち主をたろうは知っていました。

^{えが} ^お ^{かえ}
 いつも、たろうに笑顔であいさつを返してくれます。

^{とき} ^{えき} ^{こま} ^{ひと} ^{こえ}
 ある時は、駅で困っている人に声をかけていました。

その時、聞き覚えのある声が聞こえました。

「すみませーん、忘れ物が届いていませんか？」

ゆうこは、駅にかけつけました。

「これですね。…ボールですか？」

ゆうこの忘れ物を抱えてきたのは

あの笑顔がすてきな駅員さんでした。

「はい！会社でバレーボールをしています…」

二人で長く話すのは、これが初めてのことでした。

ゆうこは、うれしい気持ちと緊張で、

頬が赤くなっていくのを感じました。



しゃない お なかま ふくろ も
車内のそうじを終えた仲間が袋を持ってきました。

ひ わす もの ふたり むす
あの日の忘れ物がきっかけで、二人は結ばれました。

せっけん も
「ゆうこ、石鹸持った？」

きょう せんとう い まえ とおまわ
今日は銭湯に行く前にちょっと遠回りしようか」

き も ゆうぐ
「気持ちのいい夕暮れね」

かわぞ みち ふたり かた ある
川沿いの道を二人は、ゆっくりと語らいながら歩きます。

「^こぼくは^こ子どものころ、^{でんしゃ}ここからよく^て電車に手をふったよ」

^{でんしゃ}電車が^{ふたり}二人を^{よこぎ}横切っていきました。

「^こぼくらの^い子どもが^{じだい}生きる時代にも、^{ふうけい}この^{のこ}風景を残したいな」

「この^{へいわ}平和な^{ひび}日々が^{つづ}ずっと続いてほしい…」



あかでん
「おかあさん、赤電いるよ!」

あかでん おすこ て にぎ
ゆうこは、赤電にかけよる息子の手をぎゅっと握りました。

しょうわ ねん もくせいしゃりょう はんどうてつせいしゃりょう い はじ
昭和37年、木製車両から半銅鉄製車両に入れかえが始まり、

あかでん とうじょう
赤電が登場したのです。

しゃりょう ひかり はんしゃ かがや
車両は光を反射して輝いてみえました。

「あ、おとうさんだ!かっこいい。おーい!」

その^{こえ}声に^{こた}応えるかのように、たろうは^{ほほえ}微笑みました。

たろうは^{しろ}白い^{てぶくろ}手袋をした^て手を^あ上げ、^{ふえ}笛を^ふ吹きました。

^{あかでん}赤電^{しゅっぱつ}の出発です。

だいゆうざんせん

大雄山線ものがたり

だいさん わ

第三話

そしてこれからも…



へいせいじゅうごねん あたら せっち じどうかいさつき とお
平成十五年、新しく設置された自動改札機を通り、

だいうざんえき じょうしゃ
ゆいは大雄山駅から、乗車していきます。

せき すわ と だ
席に座ると、かばんからえんぴつとスケッチブックを取り出しました。

きょう か と
「ゆい、今日もまた描いているの？ケイタイで、撮ればいいのに」

じぶん み か
「うん。いいんだ。自分で見て描きたいんだ」



「なにをかいているの？」

いね みず た ふうけい ひと か
「稲と水がきれいで、田んぼの風景と人を描いています」

「なにをかいているの？」

やまやま ふじさん だけ
「はこねの山々と富士山とやぐら岳だよ」



ゆいは、えんぴつ^{はし}を走らせながら、

おだやかな風景^{ふうけい}をながめ人々の生活^{ひとびと}に想い^{せいかつ}をはせています。

ゆいは、ちいさなころの夢^{ゆめ}を見^みていました。



えきいん でんしゃ み い
ゆいは、駅員だったおじいちゃんと、よく電車を見に行きました。

でんしゃ はし
「なんで、ここに電車が走っているか わかるかい？」

せいかつ
「みんなが、ここで生活をしているからだよ」

ゆいは、おじいちゃんのおはなしが大好きです。

まだ電車が木でできていたころのおはなしや、

戦争が終わって駅員になった話…。

「電車は、たくさんの人の物語をのせているんだよ」

「ゆいが、おじいちゃんのおはなし かいてあげるね」



きせつ きょう そつぎょうしき
季節はめぐり、今日は、ゆいの卒業式です。

でんしゃ かえ さいご ひ
みんなで電車で帰る、最後の日です。

みち あゆ
ここから、それぞれの道を歩みだします。

あ
「また、いつかここで会おうね」



だいゆうざんせん ひやくねん
「大雄山線ができて百年たつんだって!」

いま れいわ
「すごいね!今は令和だから…えっと」

ひやくねんまえ でんしゃ
「百年前の電車って、どんなだったのかな?」

「^{わたし}私^{かあ}のお母さんが、^{だいゆうざんせん}大雄山線ものがたりを、^よ読んでくれたよ」

「^きぼくも聞きたい! ^{はなし}どんなお話?」

「これからも、ずっと『つづく』ものがたりなんだって」

つづく

—ありがとう、
そしてこれからも—